

ほぼ1年前、不知火グループで、「人をバカ呼ばわりする文章」について議論がなされた。そのことはずっとモヤモヤしているので、すこし書きとめておきたい。

第1に、文章に書くというのは大事なことで、だから、こうして不知火グループも、年にいっぺん個人メモのようなリーフレットを出している、しかし、文章はひっきょうトリのガラのようなものだということをしっかり意識していきたい、ということである。

文台ひきおろせばすなわち反故(衄)なり

連歌で一晩明した記録を巻いて、机からおろしたら、それは反故にすぎないというのである。場があって、集うた者が発したり付けたりして場が刻々変りながら、それでいて全体が形成される。1つの時空間の内容や雰囲気全てをひっくるめたのが連歌なのだ。

全共闘は、そういう言い方があてはまる場だったと、私は思っている。それはさておき、文章は、文章を書いた紙は、襖の下張りに使われるような筋合いのものだ。しかし、反故もガラも下張りもきつすぎるといふなら、骨格と妥協してもいい。これなら輪郭がうかがえるし、しゃぶればダシも出る。

文章が骨格だとすると、人は二つの方向で文章と格闘することになる。1つは骨格で勝負できる論理的な文章を書くように努める。1つは骨格に肉をのせ羽が生えてくるように幻想させる文章を生み出すように、これはもう、死闘をつくす。後者はいわば自分で作家と名のる人たちだ。私たちは、ふつう前者でもないし、いわんや後者ではもちろんない。だから、文章はガラだとみなす作法が大事になってくる。ガラなら作法もなにもない、何書いたっていいじゃないかと誤解しないでほしい。ガラはガラであって余分な肉はつけないということだ。かなしいかな、私たちはどうしても肉をつけてしまう。でも肉をつけまいと気をつける、気にかけることはできる。

第2に、じゃあ、どんな肉に気をつけるかということ、何といても、相対(7イイ)で使う言葉に気をつける、ということである。相対は、目は口ほどにものをいい、の世界だから、使われる言葉は身振りや表情と切りはなすことができない。その代表的な、というより、私たちが日常で一番使う言葉は「バカ」だと思う。

「バカッ」「バカーッ」「ばかぁ」「かか…」「ばあーか」「ばかばか」……。

水俣で「ぐあんたれ」という言葉がある。「チッソの、ぐあんたれっ、が」などと使う。きだみのるの「気ちがい部落」ものに、彼の愛車「どぶねずみ号」が出てくる。動かなくなると、きだみのるは、「このぐあんたれがっ」とけつとぼす。するとエンジンがかかたりする。「ぐあんたれ」を説明して下さいと、水俣で何度かせまったが、しょうがなく説明してくれるのを、端の者はそうじゃないと不満気に打ち消す。つまり、使う場が大事なのであって、その状況で言い方が千変万化し、意味もちがうことになる。

「バカ」もそういう言葉である。だから文章の中で相対のつもりで「バカ」をつかうと、冷酷無残な人を見下し差別する表現に受け取られる、そういう場合がおうおうにしている。そのとき、そんなつもりで言ったんじゃないと言っても、おそいのだ。

このグループも、いったいに、文章を書きたくない者がそろっている。相対やおしゃべり、すなわち場を重んじているからと言える。しかし、ガラにはガラの価値がある。一方、文章がこわくない人には、ガラだから気をゆるめずに、と言いたいのである。